

3. 3つの展覧会

東京会場（在日本フィンランド大使館）で示した同一の「18 のオブジェクト」を、フィンランド・ヘルシンキ（アアルト大学）、ドイツ・ベルリン（ベルリン工科大学）、ワイマール（バウハウス大学ワイマール校）の2国3都市の異なる文脈に沿って紹介する「3つの展覧会」を2021年10月より実施していきます。

その背景には、特に建築におけるナショナル・ロマンティシズムが地中海世界を中心としたヨーロッパの周縁部に伝播したアール・ヌーボー様式の地域主義的表現とみなされてきたということがあります。

しかしながら、ナショナル・ロマンティシズムの本来の精神構造のメカニズムを明らかにし、言語化することで、同様の構造を持った「第三の場所」にも適用できる普遍的な創作理論とすることを目指しました。そのため、同一の展示物をそれぞれの場所性が持つ異なる文脈から紹介する方法を採っています。

フィンランド・ヘルシンキを会場としてナショナル・ロマンティシズムを再発見する文脈は、「ネーション・オブ・ソロウ：Nation of Sorrow」（哀しきネーション）という価値観へと結実していきました。日本の古語での意味にもあるように、ここで言う「哀しみ」は、「愛しみ」でもあります。

次に、そのメカニズムによって作られる建築を「クロスオーバー・アーキテクチュア：Crossover - Architecture」と呼んでいます。ベルリンでは、この文脈からヘルシンキ会場と同じ展示物を説明しています。クロスオーバーという枕詞は、「建築以外の分野の技術＝デザイン言語を用いた建築デザイン」を意味しています。

最後に、そのクロスオーバー・アーキテクチュアの空間的性質を指して「シナスタジア・シーナリー：Synesthesia Scenery」（共感覚空間）と呼んでいます。

このように、日本の東京でフィンランドのデザイン史観から見出された展示物＝オブジェクトがフィンランドを経由してドイツのベルリン、ワイマールへと異なる文脈を移り渡っていきます。それに従い、3つの展覧会の主題もフィールド編：ネーション・オブ・ソロウ、理論編：クロスオーバー・アーキテクチュア、実践編：シナスタジア・シーナリー、の3つのステップとして位置付けられ、一本の深化した道筋を照らしていきます。

Field ver.



Logic ver.



Practice ver.



Nation of Sorrow

@Helsinki

Aalto Univ.
6th-20th Oct. 2021

JAPANESE
CROSSOVER-ARCHITECTURE

@Berlin

T.U.Berlin
7th Jun. 2022- (one year)

Synesthesia Scenery

@Weimar

Bauhaus
Mid of Jun. 2022



Unity ver.



Unity Architecture in Finland and Japan

-3projects, 3exhibition, 18objects-

@Tokyo

Embassy of Finland
20th-26th Sep. 2021